

# 神奈川県発掘調査成果発表会

2022

## ◆ 日 時

令和4年8月11日（木・祝）14:00～16:30（開場13:30～）

## ◆ 口頭発表

14:05～14:35	厚木市「三田林根遺跡第3地点」 西野 吉論（株式会社 玉川文化財研究所）	——	1
14:35～15:05	小田原市「久野山神下遺跡第Ⅸ地点第2次調査」 /久野多古境遺跡第Ⅹ地点 前川 昭彦（株式会社 玉川文化財研究所）	——	3
15:05～15:15	休憩		
15:15～15:45	相模原市「中野中里遺跡第2次調査」 田村 典雄（株式会社 睦合文化財研究所）	——	5
15:45～16:15	海老名市「河原口坊中遺跡第12次調査」 小森 明美（株式会社 玉川文化財研究所）	——	7
16:15～16:25	質疑応答		

## ◆ 紙上発表

小田原市「久野下馬下遺跡第Ⅵ地点」 香川 達郎（株式会社 玉川文化財研究所）	——	9
横須賀市「怒田城跡」 横山 太郎（有限会社吾妻考古学研究所）	——	11

会 場：かながわ県民センター 2階ホール

主 催：神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課  
中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）

縄文時代中期の大規模な集落の調査  
さんだはやしね  
三田林根遺跡第3地点

所在地 厚木市三田字林根461番1・3・5・6、466番1

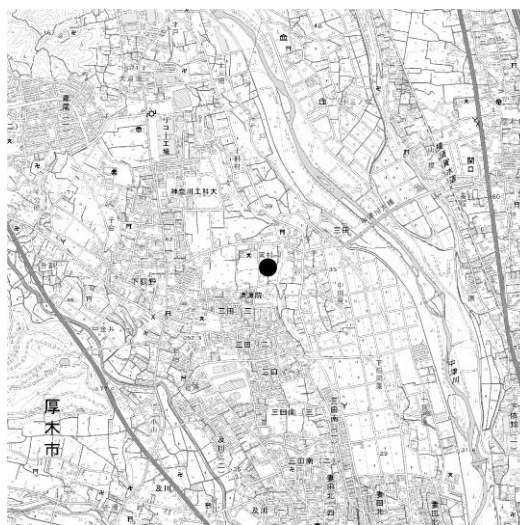
調査期間 令和2年12月14日～令和3年6月15日

調査面積 719.8㎡

調査組織 株式会社 玉川文化財研究所

担当者 西野吉論・麻生順司・坪田弘子

調査概要 三田林根遺跡は厚木市の北東部に位置しています。地形的にみると、中津川と荻野川に挟まれた荻野台地上の標高約53.8mを測る平坦部から東側縁辺部にかけて立地しています。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

本遺跡では既に北側と東側で2地点の調査が行われ、縄文時代中期後半の拠点的な集落跡が発見されて

います。今回の調査地点からもこの集落と一連のものと考えられる遺構群を確認しました。遺構の内容は敷石住居址1軒、竪穴住居址11軒、配石遺構5基、埋設土器6基、焼土址1基、土坑26基、ピット92基で、1区東側と1区中央より西側に分布しています。遺物は主に縄文時代中期後半の土器と石器が出土し、なかでも加曽利E2・E3新・E4式期の土器群が多くを占めています。

今回の調査地点で最も古い段階と考えられる加曽利E2式期の遺構は、竪穴住居址4軒、土坑4基です。このうちJ9号住居址は規模を変えながら3回の建て替えを行っていたと推定され、最大時の規模は6.5mを測ります。同住居址は曾利I式の大形深鉢を用いた県内最大級の埋甕炉をもち、東北地方に分布の中心をもつ大木8b式の小形深鉢が埋設されていました。また、土器の出土状態は、完形に近い土器が覆土下層を中心に廃棄されたいわゆる「吹上パターン」のような状態でした。

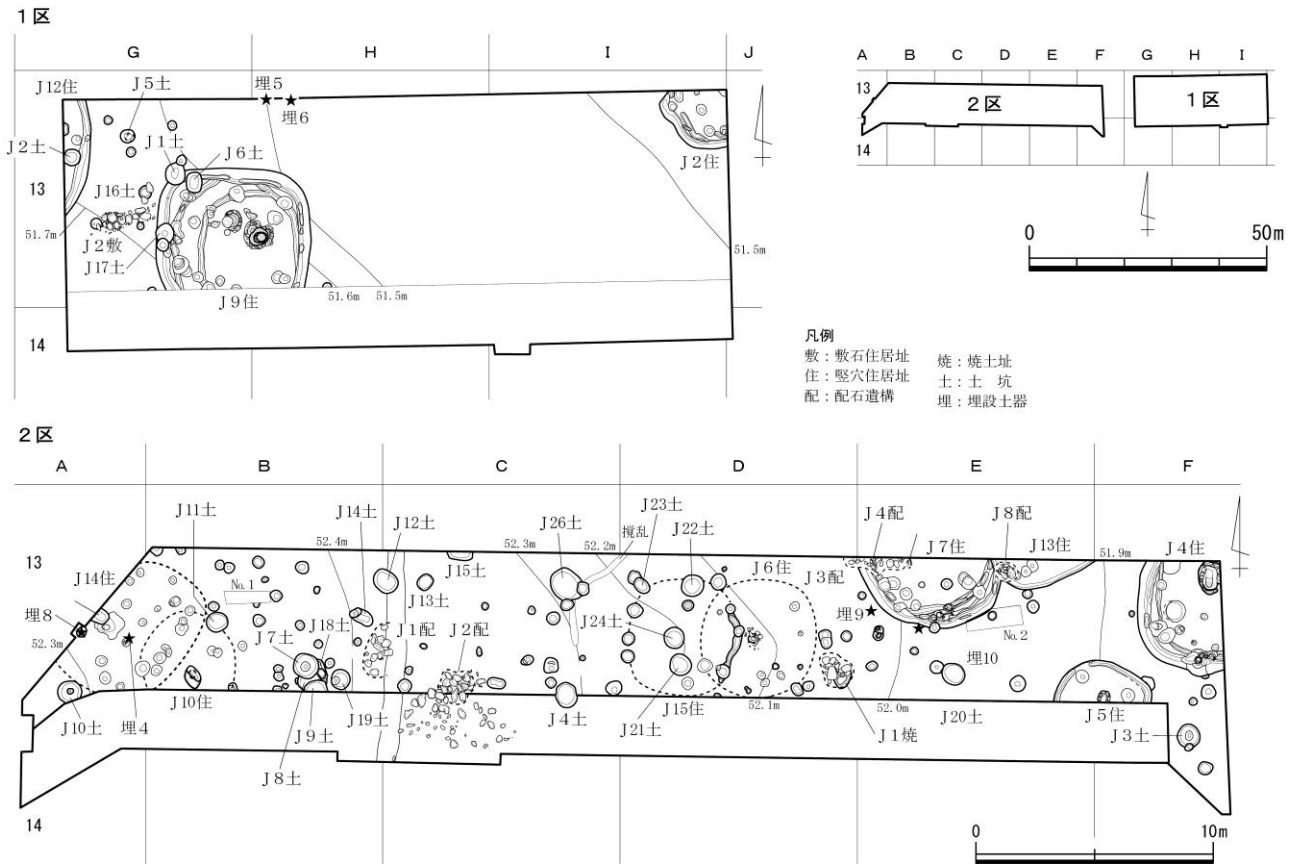
加曽利E3式期の遺構は竪穴住居址4軒のほか、埋設土器2基、土坑3基です。埋設土器や土坑は2区中央から西側に分布しています。なかでも長軸150cmと規模の大きいJ26号土坑からは、曾利IV式の大形深鉢が逆位で出土しています。

加曽利E4式期になると第2地点に続き2例目となる敷石住居址1軒のほか、竪穴住居址1軒、配石遺構5基、埋設土器4基、土坑1基を検出しました。配石遺構は数基が群をなすように位置し、分布の中心が調査区西側にあり、さらに南側へ広がると考えられます。

縄文時代以外では、弥生・古墳時代の竪穴状遺構1基、ピット12基、奈良・平安時代の溝状遺構1条、道状遺構1条、土坑6基、ピット4基を検出しました。

まとめ 今回の調査では、中期集落域の南側と西側への広がりを確認できました。また、加曽利E2～E4式期の良好な一括出土土器群は、神奈川県西部の基準資料として位置づけられます。

(西野吉論)



第2図 縄文時代遺構分布図



J9号住居址調査風景（北から）



弥生時代中期後葉宮ノ台式期の集落と墓域の調査  
く の やまがみした  
久野山神下遺跡第Ⅸ地点第2次調査  
く の た こざかい  
久野多古境遺跡第Ⅹ地点

**所在地** 小田原市久野548番地内  
**調査期間** 令和3年4月28日～令和3年11月5日  
**調査面積** 2,190㎡  
**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所  
**担当者** 前川昭彦・秋山重美  
**調査概要** 本遺跡は小田急電鉄小田原線足柄駅の北西450mに位置し、地勢的には箱根外輪山から東に派生する久野丘陵の先端部、南側斜面の標高約20～30mにかけて立地します。この南側斜面一帯は小田原市No.98遺跡として知られ、弥生時代中期後葉宮ノ台式期の方形周溝墓が多数発見されています。本遺跡も宮ノ台式期を中心に報告します。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

本調査区の南西側隣接地(丘陵裾部)で行われた久野山神下遺跡第Ⅸ地点第1次調査では、平安時代や古墳時代後期の竪穴住居址などのほかに、宮ノ台式期の方形周溝墓、土器棺墓、土坑などが発見されていました。これらの調査結果を踏まえた今回の調査では、同時期の竪穴住居址6軒、方形周溝墓6基、溝状遺構4条、土坑1基を発見しました。他の時代の遺構・遺物も発見されましたが、遺物の大半は宮ノ台式期のもので、遺構の構成や遺物の時期はNo.98遺跡のこれまでの調査成果を補完する内容となっています。

まず、先行して構築された竪穴住居址群は、標高28mより上方に偏在します。Y4号住とY6号住が重複しますが、他は一定の距離を置いて構築されています。そして、竪穴住居址群を壊して展開するのが方形周溝墓群です。墓域は、丘陵裾部の第1次調査区から、本調査区の上端まで、斜面全体に広がります。このことから、この丘陵南側斜面ではまず集落が営まれたのち、墓域が取って代わったことがわかりました。

方形周溝墓6基のうち、Y1号とY2号からは埋葬施設が発見されました。それぞれ方台部中央とその脇に2基ずつ配置されています。また、Y1号には南溝内から周溝内埋葬と考えられる、土坑に納められた壺棺が発見されています。

**まとめ** 本調査区における弥生時代中期後葉宮ノ台式期の竪穴住居址群は、No.98遺跡のなかでは久野山神下遺跡第Ⅴ地点、第Ⅶ地点に次ぐ発見であり、この調査によって集落南東側の一端が捉えられたこととなります。また、この集落を壊して展開する方形周溝墓群は、これまで発見されただけでも約60基を数え、未調査区を含め久野丘陵南側斜面全体に広がることを確認されました。今後は、この広大な墓域に対応する集落の発見が課題となるでしょう。(前川昭彦)



## 祭祀に供された墨書土器を含む多くの燈明具が出土した山間域の集落遺跡

なかのなかざと

# 中野中里遺跡第2次調査

**所在地** 神奈川県相模原市緑区937-2

**調査期間** 令和3年10月25日～令和4年1月14日

**調査面積** 538.962㎡

**調査組織** 睦合文化財株式会社

**担当者** 田村典雄・金箱文夫

**調査概要** 神奈川県警察津久井警察署新築工事に伴い調査を行いました。遺跡は相模川が山間部にさしかかる津久井湖（人造湖）右岸の河岸段丘上に立地し、遺構検出面の標高は163m前後を測ります。本遺跡の1.5km東に太井己遺跡、3km西に三ヶ木団地内遺跡が位置します。これらの遺跡では同時期の古代の集落が展開し、墨書土器の出土例が報告されています。また、本遺跡の南西200mには、近世から近代にかけて周辺の集落の街道として機能した津久井往還が知られています。



第1図 遺跡位置図

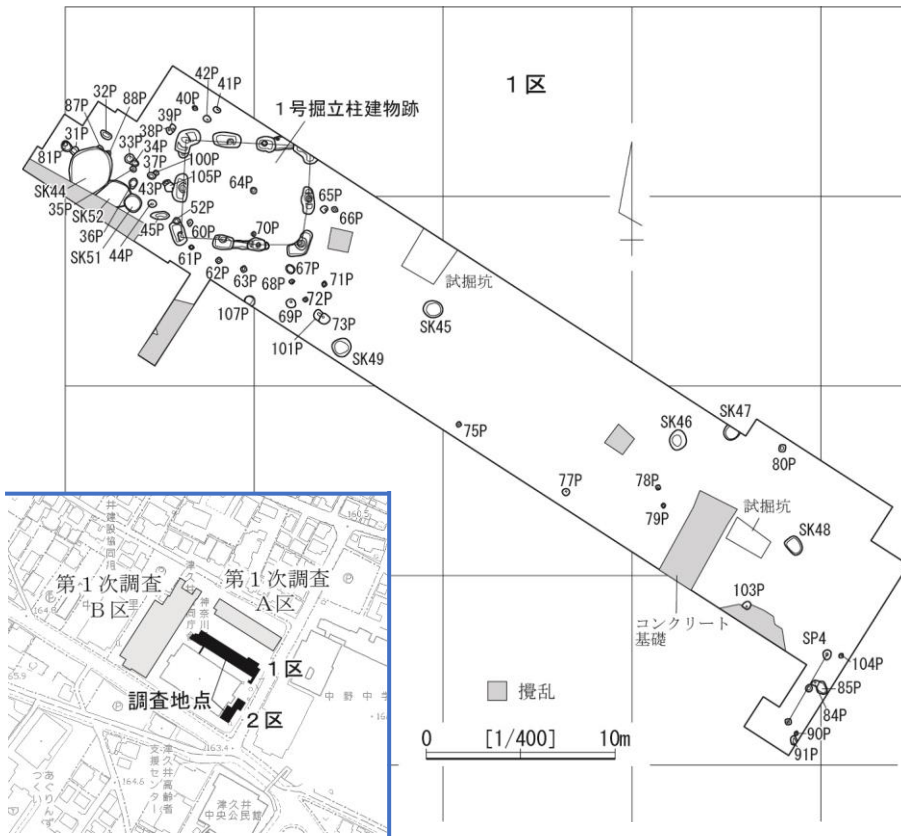
**縄文時代** 土坑4基（1区）、ピット26基（1区）が発見されました。第1次調査と同様に陥し穴と思われる土坑が2基検出されています（写真⑤）。遺構外からは、中期初頭～後期中葉の土器・石器が出土しました。

**奈良・平安時代** 掘立柱建物跡1棟（1区）、土坑8基（1区）、ピット列2列（1区と2区）、ピット51基（1区48基、2区3基）が発見されました。1号掘立柱建物跡は平安時代（9世紀後半）に作られたものと考えられます（第3図・写真①）。この遺構からは、土師器、須恵器が出土しました（写真③）。掘立柱建物跡周辺からは燈明具として使用された可能性のある内面に煤が付着した土師器坏が多く出土し、煤付着の坏には墨書土器1点が含まれます（写真④）。その他5号ピット列（8世紀代）から鉄鏝が出土しました（写真②）。

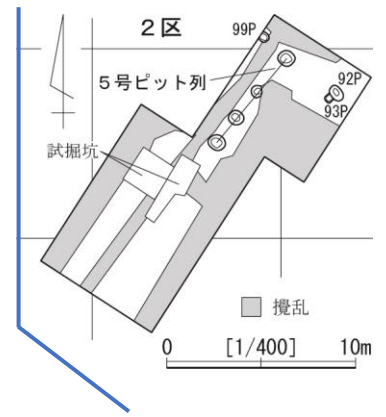
**近世以降** 土坑43基（1区38基、2区5基）、ピット列3列（1区）、ピット9基（1区8基、2区1基）、畝状遺構46基（1区）が発見されました。土坑の大部分は細長い形態のもので、耕作に伴うイモ穴（貯蔵用）と考えられます。出土遺物は、近世の陶器、磁器、砥石や近代の陶器、磁器などが出土しています。

**まとめ** 縄文時代については、陥し穴と思われる土坑のうち1基が、第1次調査で確認された緩斜面に配列する陥し穴列に連なることが推測されます。平安時代については、第1次調査で確認された竪穴建物跡や掘立柱建物跡（9世紀後半～10世紀初頭が中心）と1号掘立柱建物跡はほぼ同時期にあたり、小さな谷に沿って集落が立地していたことが推測されました。また、第1次調査で鉄鏝が出土していること、本遺跡周辺でも墨書土器が出土し類似した集落構成を見せる遺跡があることから、山間域の集落は山岳祭祀などによって結びついていた可能性があります。近世以降については、本遺跡一帯は広く耕作地として利用されていたと推測されます。（田村典雄）





第3図 奈良・平安時代の遺構分布図（1区）



第2図 奈良・平安時代の遺構配置図



写真② 5号ピット列出土鉄鍬



第4図 第1次・第2次調査区位置関係図



写真① 1号掘立柱建物跡（南から）



写真③ 1号掘立柱建物跡出土須恵器杯



写真④ 遺構外出土土師器杯「中」墨書土器



写真⑤ 縄文時代 陥し穴（南から）

## 相模川東岸の自然堤防上に立地する弥生～近世の遺跡調査

かわらぐちぼうじゅう

# 河原口坊中遺跡第12次調査

**所在地** 海老名市河原口三丁目地内  
**調査期間** 令和3年1月27日～令和4年2月4日  
**調査面積** 1140.2㎡（1区414.3㎡、2区725.9㎡）  
**調査組織** 株式会社玉川文化財研究所  
**担当者** 小森明美・小林義典・河合英夫

**調査概要** 河原口坊中遺跡は、小田急小田原線海老名駅から西に1.3km、相模川東岸の自然堤防上に立地します。直線距離で約520m離れた2カ所の調査を行いました。

**近世以降** 1区・2区共に溝状遺構、畝状遺構、土坑などの耕作に関わるとみられる遺構が発見されました。

**中世** 発見された遺構は竪穴状遺構、溝状遺構、道状遺構、

段切り状遺構、井戸址などです。このうち1区で発見されたC1号溝状遺構は、幅約4.5m、深さ約2.2mに及ぶ大規模なもので、断面形が薬研状を呈し、ぴたりと南北方向に調査区を縦断します。また、同じく1区で、県内でも出土事例の少ない銭貨である和同開珎が出土しました。

**古墳時代中期～奈良・平安時代** 1区で30軒、2区で90軒に及ぶ竪穴住居址のほか、掘立柱建物址、竪穴状遺構、溝状遺構、遺物集中、土坑、ピットが発見され、夥しいと言ってよいほどに遺構同士が重複している状況が確認されました。竪穴住居址の分布は両調査区の全域に及んでおり、古墳時代中期に始まり後期をピークとして途切れることなく続きます。その後、一旦は集落の規模が縮小するようですが、奈良・平安時代の遺構・遺物も確認されています。また、古墳時代中期に特徴的な勾玉、小玉などの玉類や鏡の石製模造品なども出土しました。

**弥生時代後期～古墳時代前期** ほうけいしゅうこうぼ 方形周溝墓を主体として、竪穴住居址、溝状遺構、土坑などが発見されました。方形周溝墓は調査区内全域に分布しており、今回の1区・2区間でこれまでに行われた調査の成果を合わせると、一大墓域であったことが分かりました。主体部は発見されませんでした。溝の内部から略完形の土器などが出土しました。

**弥生時代中期** 方形周溝墓とその一部とみられる溝状遺構、土坑、ピットが発見されました。中期の方形周溝墓は四隅が途切れる形態のものが特徴的で、比較的整然と配置されています。後期と同様に広範な墓域を形成していますが、今回は2区の北東部で方形周溝墓が分布しない空白部が確認されたことから、墓域の北限が確認できたものと考えられます。

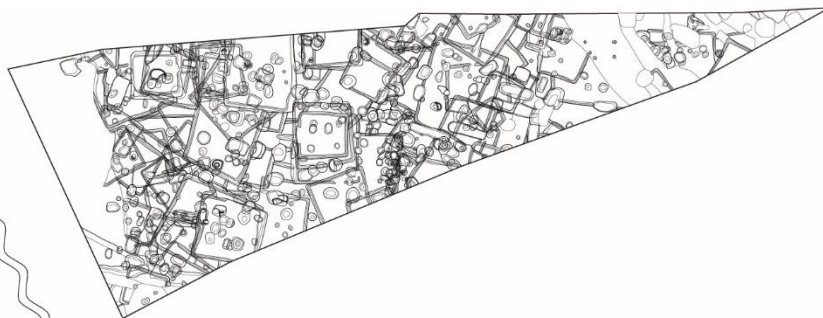
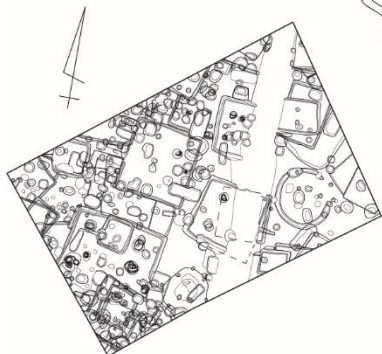
**まとめ** 今回の調査では、弥生時代中期から近世以降にかけての遺構と遺物が発見されました。弥生時代は中期・後期共に墓域を形成し、古墳時代中期から奈良・平安時代は集落が営まれました。中世には大規模な溝状遺構や段切り状遺構、畝状遺構など、遺構の様相の変化が捉えられ、中世後半以降近世あるいは現代まで耕作地として利用されたと考えられます。（小森明美）



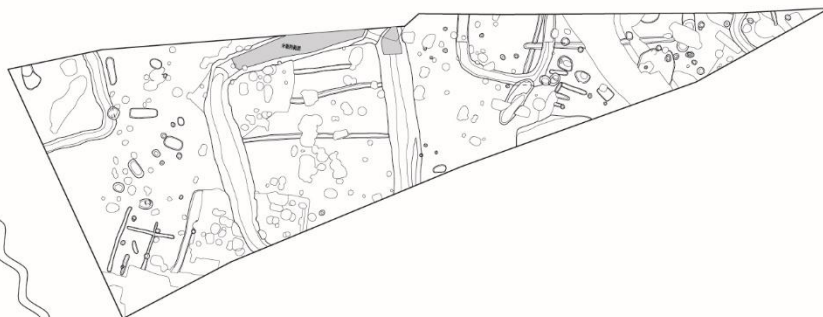
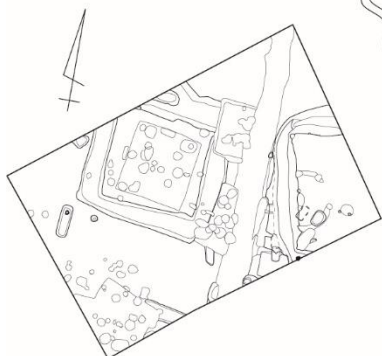
第1図 遺跡位置図（1/50,000）



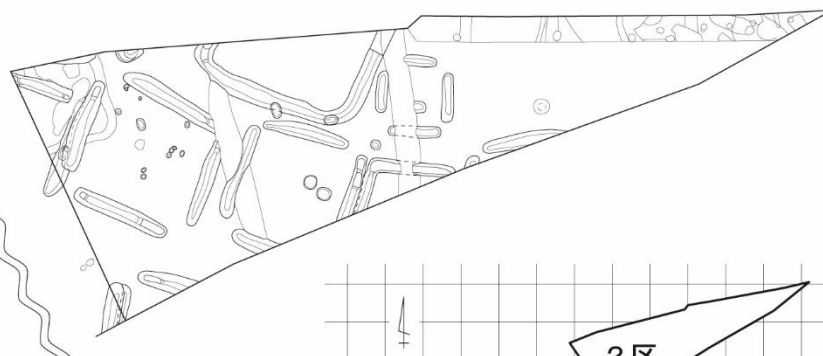
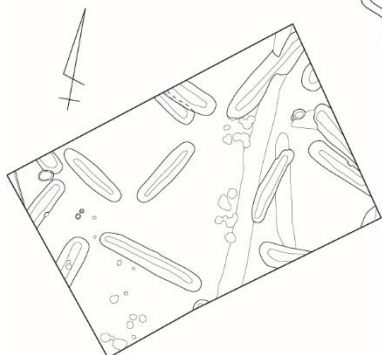
古墳時代中期～  
奈良・平安時代



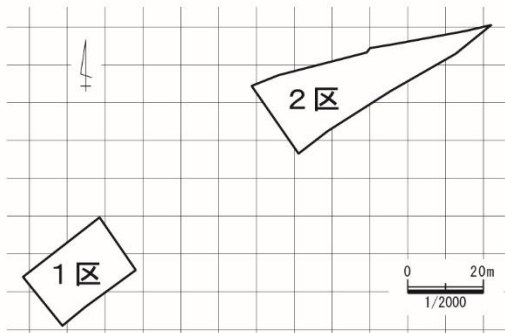
弥生時代後期



弥生時代中期



0 20m



調査区配置模式図

第2図 遺構分布図 (1/600)

沖積低地の調査  
く の げ ば し た  
久野下馬下遺跡第Ⅵ地点

所在地 小田原市久野字下馬下52番5

調査期間 令和3年6月1日～令和3年7月6日

調査面積 8㎡

調査組織 株式会社玉川文化財研究所

担当者 香川達郎・御代七重

調査概要 久野下馬下遺跡は、箱根外輪山東麓から平野部に延びる丘陵に挟まれた標高15m程の沖積低地に立地しています。遺跡内では、これまでに古墳時代中期の祭祀跡や同後期の木製品集中など特殊な遺構が発見されており県内でも著名な低地遺跡のひとつに数えられています。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

今回の調査は、下水道整備に伴って地中に打ち込まれた直径3.2mの立坑（鋼製ケーシング）内で行われました。

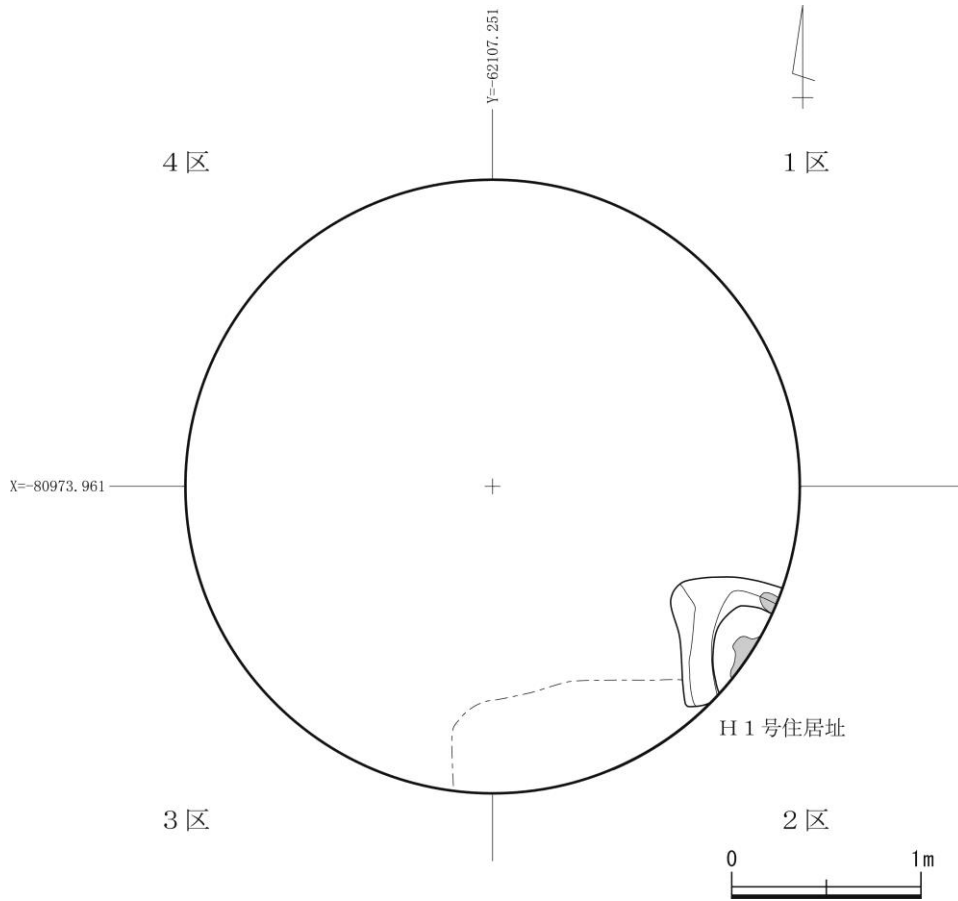
調査は立坑内に堆積していた土層を人力で掘り下げながら遺構と遺物の確認に努め、最終的に現地表下4.7m、標高にして10.7mの深さまで達しました。土層は表土を除いて11層に分けられましたが、主に河川由来の自然堆積で、各層から出土した遺物の傾向や土層堆積の前後関係を検討した結果、表土に近い土層から近世・中世、奈良・平安時代、古墳時代、弥生時代の各時代に堆積していることが推定されました。最下層からは弥生時代後期～古墳時代前期初頭の高坏、壺、甕の破片が出土し、これらが今回の調査で最も古い出土遺物に位置付けられました。

遺構は、現地表下3.4m付近で竪穴住居址が1軒発見されました。硬い貼床とカマドの一部が見つかり、その位置関係から住居の北側にカマドが造り付けられていることが想定されました。遺物は貼床上とカマド内から土師器の坏や高坏、および甕などが出土し、これらが鬼高式<sup>おにたかしき</sup>の特徴を備えていたことから、古墳時代後期の住居址であることが確認されました。

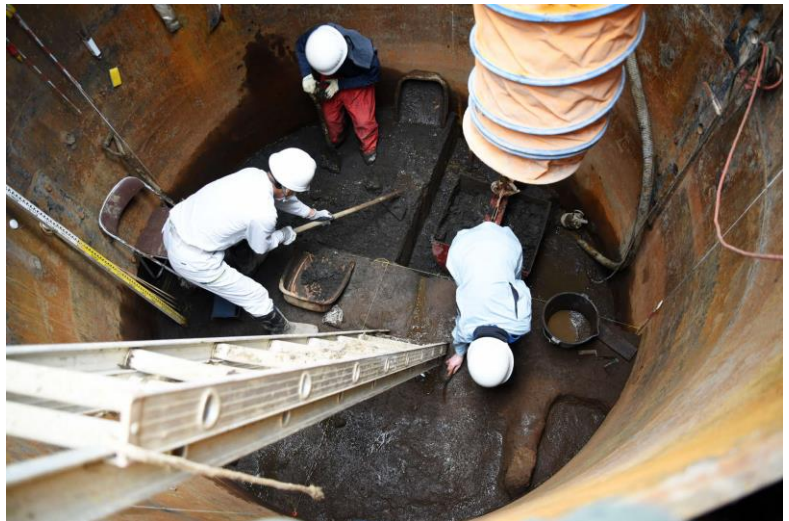
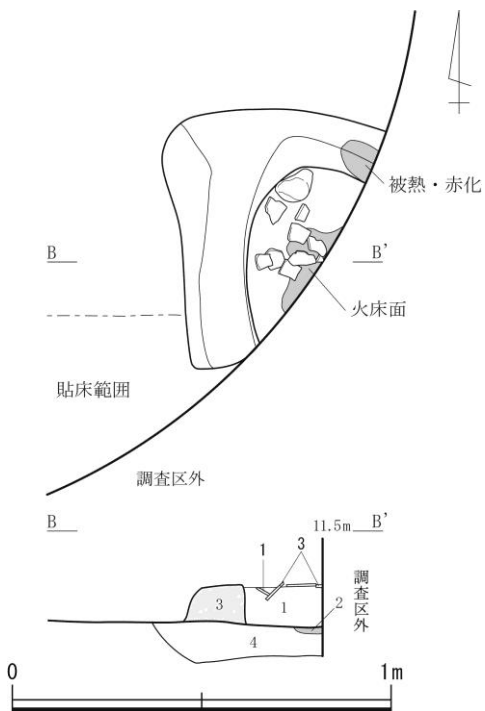
まとめ 今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居址を1軒発見しました。この発見によって、すぐ西隣の下馬道上遺跡第Ⅲ地点（伊藤ほか2013）で発見されていた同時期の集落範囲がさらに東側へ広がることが明らかになりました。また、調査時には高い地下水位に悩まされましたが、住居の発見により、低地のなかでも洪水など河川の影響を受けにくい微高地に立地していることが考えられました。そして、住居の発見された位置より下層からは、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃の土器片が出土したことから、この時期の人間活動痕跡が周辺に残っている可能性が考えられました。以上のようにごく小範囲の調査でしたが、久野下馬下遺跡の一端を捉えた調査となりました。

（香川達郎）

【参考文献】伊藤貴宏ほか 2013『久野下馬道上遺跡第Ⅲ地点』玉川文化財研究所



第2図 遺構配置図 [S=1/40]



発掘作業状況（南から）

第3図 H1号住居址カマド  
[S=1/20]



## 中世以降のムロ状遺構の調査

ぬ た じょうあと

# 怒田城跡

**所在地** 横須賀市若宮台579-1  
**調査期間** 令和3年10月18日～11月24日  
**調査面積** 29.5㎡  
**調査組織** 有限会社吾妻考古学研究所  
**担当者** 横山太郎・碓井三子

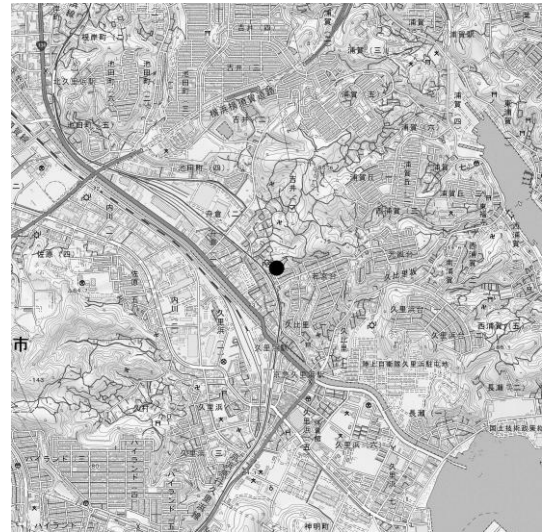
**調査概要** 今回の調査地点は、横須賀市浦賀丘付近から南西側に突出する台地の南向き崖面裾部に立地しています。この台地は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて活躍した三浦一族の城である怒田城の所在地とされており、近くに「舟倉」という地名が残ることから三浦水軍の軍船を格納する施設があった可能性も指摘されています。そのような推定を裏付ける考古学調査としては、

1979（昭和54）年に泥岩礫を用いた炉跡1基が、1992（平成4）年に2条の空堀と土橋状遺構が検出されており、遺跡の性格の一端がしだいに明らかになってきたと言えるでしょう。また、時代は異なりますが、この台地上の一体は縄文時代の貝塚を含む神奈川県指定史跡「吉井貝塚を中心とした遺跡」（横須賀市No.24）としても知られています。

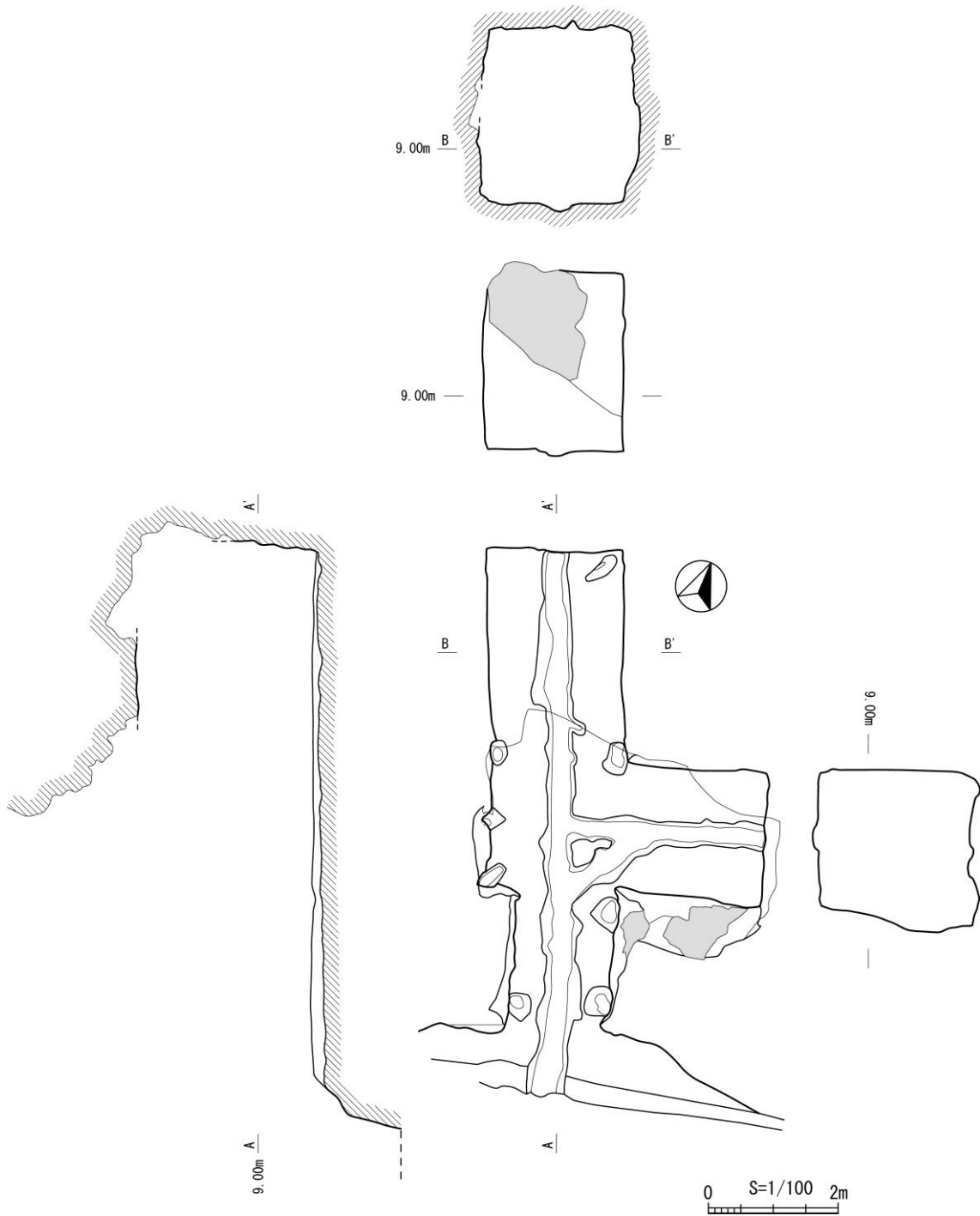
今回調査されたムロ状遺構は、三浦層群逗子層を主体とする岩盤に掘り込まれ、床面の高さは現在の生活面とそれほど落差のない標高8.1m程でした。形状は北室、前室、東室がL字状に並び、前室の南側に入り口への通路を持つ、整った直方体を基調としています。床面からは排水施設と思われる溝3条と、間仕切り、または天井の支えなどの用途が推定される浅いピット8基が検出されました。ただ、遺構の内部は現代の崩落土に覆われ、構築時の遺物は残されていなかったため、残念ながら遺構の作られた正確な時期や性格を明確にすることはできませんでした。

まとめ 本遺跡の西側5kmの位置には『吾妻鏡』や『源平盛衰記』に衣笠合戦の舞台として登場することで有名な衣笠城跡（横須賀市No.53）があります。また、その衣笠山の山頂付近に位置する坂の台経塚（横須賀市No.83）では、1919（大正8）年に青銅製経筒、青白磁人形水滴、青白磁合子、和鏡、火打鎌、刀が発見されています。その他にも近隣にはいくつかの中世の遺跡が残されており、この地域に当時の人の営みが連綿と続いていたことが確認できます。

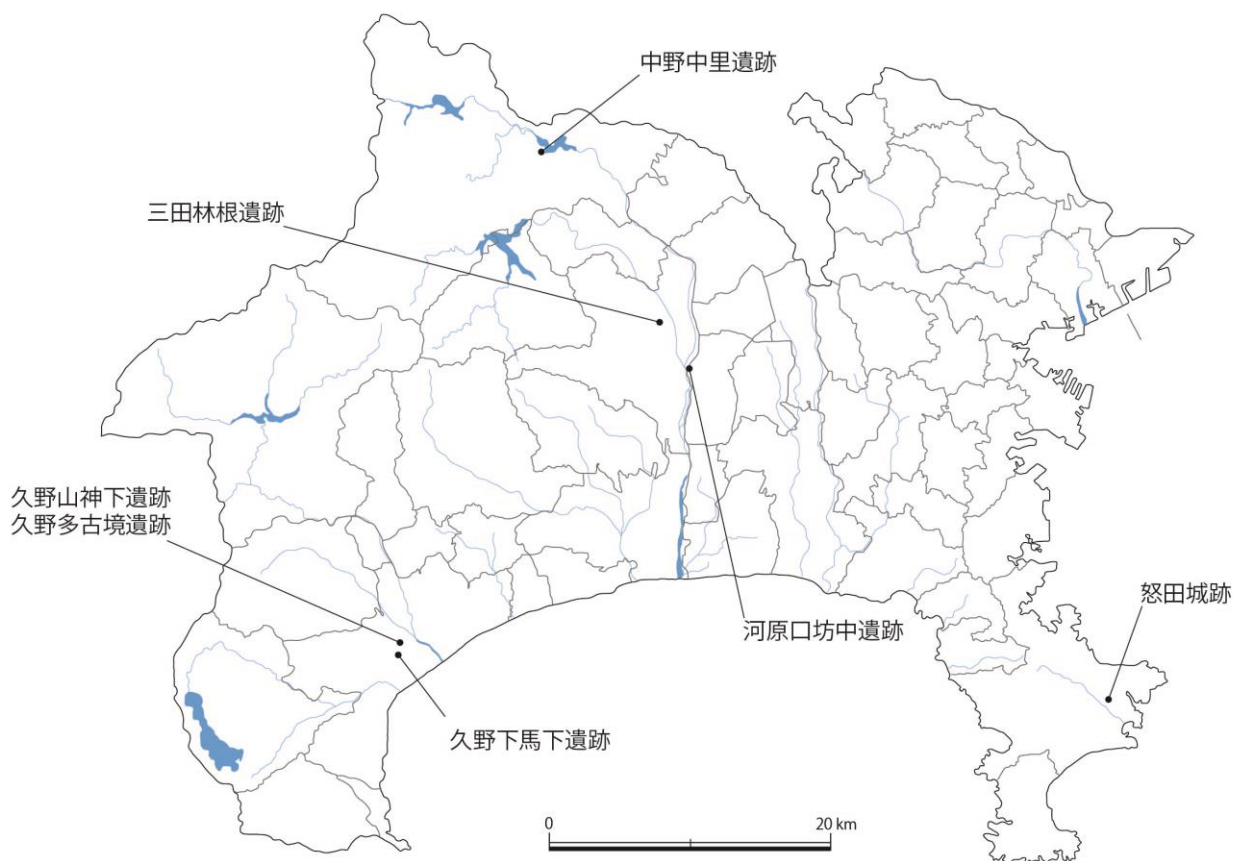
今回調査されたムロ状遺構は整った直方体を基調とし、排水溝やピットを伴うしっかりとした造作を備えていることから、何らかの施設であったことは間違いありません。中世～近世の地域の歴史の中に位置づけられる遺構の可能性が高いと考えていますが、遺物が出土しなかったため安易な推定は控えなければなりません。しかしながら今回のような小さな調査を丁寧に積み重ねていくことによって、地域の様相が少しずつ明らかになっていくものと思われます。（横山太郎）



第1図 遺跡位置図（1/50,000）



第2図 △口状遺構 (1/100)



今回発表の遺跡

神奈川県発掘調査成果発表会は、神奈川県が行う開発事業等に伴って実施された発掘調査の最新の成果を一般の方々に公開し、埋蔵文化財への理解を深めていただくことを目的としています。

令和4年度

神奈川県発掘調査成果発表会 2022

発行日 令和4（2022）年8月11日

編集・発行 神奈川県教育委員会教育局 生涯学習部文化遺産課

中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町 3-191-1

TEL 045-252-8661

FAX 045-252-8663